

共通の口実

私の第二段の工作というのは、彼をたきつけて、万知子を誘惑させることでした。

一方では、万知子に、

「キスもいけないよ」

と一線を画し、一方では、彼をたきつける。これは、ムジエンした行為でしたが、ここに、私の詐計があったのです。

私は、彼から、万知子との交際の経過を、日をきめて、細大もらさず、ききました。それによって、進行情況が、手にとるように、わかります。

「きょうはキスしました」

ある日、彼は、そのように報告したのです。

彼のすぐ腕にかかっているのは、万知子など、赤ん坊の手をねじるようなもので、すっかりアツくなってしまっているらしいのです。このふん

でゆくと、キスはおろか、彼が要求すれば、からだまであっさり投げ出しかねないでしょう。

「よし、そこまでだ！」

と、私は、彼に命じました。

「そこらあとの進行は、見合せだ！ まあ、適当にあしらっているんだな」

それから、今度は、万知子を私のアパートにひとりだけで呼びよせました。

「万知子、その後どうだい？ あっちのほうは……」

私は、それとなく、彼との交際のことに探りを入れます。

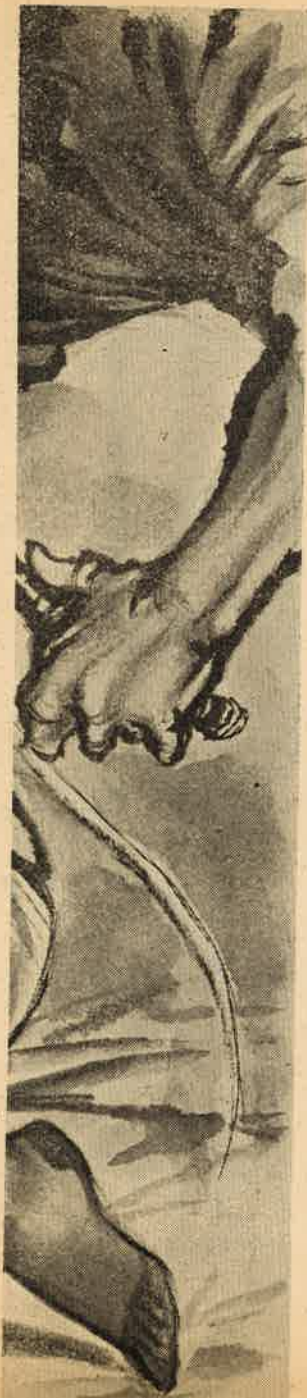
「ええ、まあ……」

万知子は、やましいところがあるものですから、そんなふうなことばをにがしています。その心理的な負い目が、私にはつけめでした。

「万知子ッ」

私は急に大声を出すと、

「万知子ッ。よくも、おじさんをダマしたな」



コワイ顔で、彼女をにらみつけました。

あんまりすごい兇器なので、彼女は、さっと顔を背ざめさせます。

「万知子。おじさんは、なんでも知っているんだぞ。おまえは、約束を破って、キスもしたな。そのほかのいるんなこともしたな。よしッ、約束を破った罰だ。おじさんが仕置きしてやるから、覚悟しろ！」

私は、ニコリともせずいい放つと、いきなり、彼女を、カバーをかけたベッドの上に押し倒し、からだを下むきにさせると、その尻をはげしくたたきはじめたのです。

これには、万知子もおどろいて、声も出ないようでした。

「お、おじさん、ゆるして……」

と、息もたえだえに哀訴します。

私はかまわずに、彼女の尻の肉を、びしっ、びしっ、激しい音を立てて打擲しました。

そのあまりのはげしさに、万知子は、

「あっ、あっ、あっ」

と、ケイレン的のうめいて、夢中であつたをまたえさせています。